

特別支援学校（病弱）小学部在籍児童の事例

心理面や健康面に課題のある特別支援学校（病弱）小学部2年生に対して配慮を行いながら進めた居住地校交流

○概要

B特別支援学校（病弱）小学部2年生のA児は、無脾症候群で酸素投与が必要であり、主治医から活動内容についての指示を受けながら学校生活を送っている。血液中の酸素飽和度（SpO₂）が低いため、ぼんやりして動こうとしないことがある。また、慣れない場面では不安と緊張が強く、動けなくなることもある。これまで、健康状態を維持することに注意しながら学習を進めてきたが、体調が悪くなり、手術を行うことになった。

本事例は、A児が入院する2か月前に、C小学校の通常の学級で居住地校交流を行ったものである。心理面・健康面の課題に配慮し、緊急時に備え、携帯用液体酸素を用意するなど、支援体制を整えた。また、A児の体調を考慮して、教室の座席位置、及び教材の工夫、活動時間の調整、パルスオキシメータによる体調管理などを行った。こうした配慮により、A児は、初めての場での学習活動に生き生きと参加することができた。

1. 対象児童について

A児：A児は、B特別支援学校（病弱）小学部2年に在籍しており、隣接する医療施設から通学している。C小学校に準ずる教育課程で学んでおり、国語は、当該学年の内容で学習を進めている。算数の学習進度は遅れており、普段の生活の中でも時間の流れや日課を意識したり、具体物を操作したりする活動を通して数量や時間の概念が育つように働き掛けている。

A児は心臓に疾患があり、鼻孔カニューラにて24時間酸素投与が必要である。運動機能に問題はないが、主治医の指示で車椅子を使用しており、移動は全介助で、教室内のみ、ゆっくり歩くことが主治医から許可されている。ボールを投げるような軽い運動や、歌を歌う、カスタネットをたたくなどの活動も制限されており、音読の音量や時間についても注意が必要である。顔色や呼吸の様子に気を付け、変調が見られたときは、パルスオキシメータで確認している。また、動脈血酸素飽和度（SpO₂）が下がることがよくあり、そうしたときには自分から動けなくなり、ぼんやりして日常生活動作もすぐに取り掛かれないため、しばらく休んで回復を待つようにしている。

A児は、言語面の発達に問題はないが、親しい大人に対しては言葉ではなく、視線や表情、指差しで意思を表現して分かってもらおうとすることが多い。身近な友達とのやり取りでは、自分の考えを通そうとして意見がぶつかり合う場面もみられるが、

慣れない場面では不安と緊張が強く、動けなくなることがある。8月に体調が悪くなり入院し、9月に閉塞した血管を広げる手術を行ったため、居住地校交流は、1回の実施となった。

2. 活動のねらい

C小学校との居住地校交流を国語と図工の授業において行った。国語に関してA児は、B特別支援学校で2年生の国語の教科書を使用して授業を行っている。そこで、児童同士が協力して取り組めるよう朗読を取り上げることにした。また、図工では、制作について様々な配慮を行い、A児が集中して取り組み、自分の力でできる自信をつけることを活動のねらいとした。

3. 事前の取組と配慮

A児が車椅子で移動しやすいように、A児の座席位置の机の間を広くとるようにした。また、交流及び共同学習の際にパルスオキシメータをC小学校に持ち込み、担当教員がA児の状態を把握し状態に応じて対応することで、常時自分の座席で過ごすことができるよう配慮した。A児の担任、B特別支援学校の養護教諭が、酸素ポンベの交換方法を、B特別支援学校の看護師から教わり、同行した。交換用として携帯用液体酸素、酸素ポンベを持参した。

A児は、その場の状況にそぐわない表情や言動をすることが多く、周囲からは関わりにくい場合がある。交流及び共同学習を行うに当たって、事前に、A児の言動や表情が人をどのような気持ちにさせるのかをロールプレイングにより学習し、同級生の言葉にどのような気持ちが込められているのかを表情カードなどを使用して関わりが円滑にできるようにする学習を行った。

また、A児からの自己紹介状を基に、C小学校の児童に対して事前にA児の活動制限についての理解を図った。

4. 活動の様子と成果

A児の運動量と精神的な高揚を抑えるために、1日の交流時間を2時間にとどめ、教室近くの段差のない出入口からC小学校の校舎に入り、座席は教室の後の出入口に近い所にした。A児は、呼吸数が多くなることはあったが、言葉掛けをすると落ち着く様子が見られた。居住地校交流で活動する間は、酸素交換もなく過ごすことができた。

また、校舎の出入り口から座席までを7メートル足らずの距離にし、その間にトイレ、手洗い場もあるので、A児は歩いて移動することができ、体への負担は最小限になるように配慮した。

最初は、A児が落ち着いて教室の様子を見聞きし、授業に参加できるようにするため引率教員がA児に寄り添っていたが、A児が一人で着席できるようになった後は、

離れて見守るように配慮した。交流学級の担任は、指名されても自己紹介ができないA児の緊張した様子を見て、臨機応変に対応し、最初は他の児童の自己紹介を聞くように伝え、A児が緊張を緩和できるように努めた。

国語の授業では、教室の様子を見やすく、また、児童同士が互いに聞き取りやすくするため、児童の机を2列でコの字型に配置した。A児は、国語の朗読を聞いているうちに、学習活動に引き込まれ、挙手をしたり、音読したりするようになった。休み時間も、他の児童と折り紙で遊ぶ様子がみられた。

図工の授業では制作活動を行った。A児と他の児童が見合ったり、話し合ったりできるように、グループに分かれて活動することにした。また、A児の体調を考慮して、図工の時間のうち1時間の授業に参加し、B特別支援学校帰校後に作品を仕上げることにし、制作に取り組む時間を十分にとるなどして、A児のペースで作業を進めることができるように配慮した。これにより、A児は、身体に負担なく集中して制作に取り組むことができた。また、介助なしで活動できるようにするため、図工で扱う粘土の種類を紙粘土の中でも特に軟らかく軽いものに変更した。そのため、一人で粘土に絵の具を混ぜてこねたりしながら、動物を作ったりすることができた。帰校後も、特に体調を崩すことはなかった。

5. 事後の取組、今後の課題

休み時間になると、大半の児童が教室から外に出て行ったが、児童の中には、A児に合わせて折り紙を準備し、A児と積極的に関わろうとした児童もいた。授業の中での自然な関わりが自由な時間の交流に発展するよう、今後も居住地交流を行い、A児と活動する機会を重ねていくことが必要である。今後も関わりを継続するために、遠隔テレビ会議や手紙に近況を書いて送るなどの取組も実現させたいと考えている。

また、C小学校では段差のない出入口が通常の学級の教室の近くにあったため、狭い範囲を短時間で移動することができ、A児にとっては大変望ましい環境であったと言える。車いす使用者が一人で活動できる範囲を広げていくためには、学校全体の施設のバリアをどのように解消していくかを考えることも今後の課題である。